

# 国際生物気候気象学会について

伊 藤 真 次

国際生物気候気象学会 International Society of Bioclimatology and Biometeorology の第1回会合が昨年8月29日から31日までの3日間パリーのユネスコ本部で開催された。この学会はオランダの Dr. Tromp の提唱によって昨年1月1日に創立したばかりで、パリーでのシンポジウムは会則の制定、運営方針の企画、各国研究単位間の連絡等を主な目的としたもので、出席者はおよそ60名であった。国別にみるとドイツが圧倒的に多く、アメリカ、イギリス、フランス、イスラエル等がこれに次ぎ、その他の諸国からは1-2名ずつが参加したにすぎなかった。学科でわけると医学関係がおよそ半数を占めていたが、気象学者も10名くらい出席していた

第1日(8月29日)は、Dr. Tromp の設立趣旨の説明と簡単な経過報告をかねた開会のことばにはじまり、ついでユネスコの自然科学部長 Prof. Auger の挨拶があった。次にアメリカの Dr. Lee を座長として役員を選挙並に推薦が行われ、つぎのように決定した。

会長 Prof. F. Sargent (アメリカ, 生理学者)  
副会長 Prof. H. Berg (ドイツ, 気象学者)  
同 Dr. H. Boyko (イスラエル, 植物学者)  
同 Prof. L. Emberger (フランス, 植物学者)  
幹事・会計 Dr. S. W. Tromp

(オランダ, 地理医学者)

顧問 Mr. W. E. A. Taylor (イギリス, 生物学者)  
同 Dr. W. G. Wellington (カナダ, 昆虫学者)

評議員は25カ国から1名ずつ選出することになり、日本の代表として久野寧教授(学士院会員)が推薦された以上の如く役員を決定した後、会則の制定に入ったが、まず学会名を International Society of "Bioclimatology" にするか、"Biometeorology" にするかについてはげしい discussion があり、これは両方を書き並べることで話がまとまった。会則は草案を逐条審議し、かなりの修正が施された。こうして午前の事務が終り、午後は地域別研究現況の報告があって、南ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、東南アジアについて、日本の現況を私が説明した。

第2日(8月30日)の午前も前日にひきつづいて地域別報告があり、カナダ、イギリス及びその植民地、西北ヨーロッパの代表者がそれぞれ演壇に上った。同日午後は特別報告として Dr. d'Avanzo (イタリア) と Dr. Carles (フランス) の航海生物気候学について、Dr. Cauet と Dr. Schulz (ドイツ) が "Electro-Aerosol" の生物に及ぼす影響について、Prof. Piccardi (イタリア) が宇宙線の影響について報告し、それぞれの問題について

討議が行われた。

第3日(8月31日)には Dr. Hicks と Dr. Beckett (アメリカ) の空気イオン化の報告があった。研究問題に関する一般的な討論がすんで後、再び事務にかえって、会員の資格についての規定を審議し、1957年1月1日以降入会希望者は、現会員2名の紹介をうけた申込書を“会員”委員会に送り、資格審査をうけて後入会が許されるという極めて厳しいものになった。同日午後は主として Subcommittee について協議が行われ、つぎの4委員会をつくることになった。

- (1) アレルギー性疾患 (委員長 Dr. Alemanyvall, スベイン)
- (2) 空気イオン化 (委員長 Dr. Kornblueh, アメリカ)
- (3) 生態学的気象図 (委員長 Dr. Boyko, イスラエル)
- (4) 実験方法 (委員長 Dr. Griffith, イギリス)

以上が昨夏パリーで開催せられたシンポジウムの大要であるが、本学会の第1回総会は本年9月23日から27日までウィーンで開かれるから、日本からも適当な人が参加することがのぞましいと思う。

学会の雑誌 International Bulletin of Bioclimatology and Biometeorology の発行並に国際文献交換所の設立について、現在 Dr. Tromp が計画をすすめており、この二つは近々のうち実現するであろう。

現在の会員数は約400名であるが、その数は今後急速にふえるものと思う。この会員のうち気象学者は50名以上に及んでいる。日本の会員は26名にすぎないが、この会の設立がまだよく知れわたっていないため、殊に気象学の方面には連絡がなかったためであろうか、わが国の権威ある方々の名前さえ名簿に見当たらないのは些か淋しい感じがする。

生物気候の問題が、気象学、生物学、動植物学、農学、生理学、医学等非常に広範囲にわたるため、各専門分科間の連絡がうまくとれず将来の発展を期待しがたいという人もあるが、その成否は運営方法の如何によると云えよう。セクショナルイズムをすて、専門を異にする人たちが互に協力して、共通の目的に向かって研究をすすめることが、これからの学問の発展に如何に重要であるか、今さら申すまでもない。ここに紹介した生物気候学の国際的な動きに伴って、わが国にもこの広い学問の分野で多数の研究者が互に連絡し協力しあう途が開ける時期が遠からず訪れるものと期待している。

(名古屋大医学部生理学教室)